

2列王記8章 11-13 節 「自分を知る」

1A ハザエルの残虐性

2A 自己を知る難しさ

1B 心の邪悪さ

2B 良く見せる性向

3B 自我と超自我

3A 自己を知る必要性

1B 回復の始まり

2B 罪の告白

3B 神の啓示

本文

列王記第二8章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは先週で7章まで来ました。預言者エリシャの働きを眺めています、今日の午後は 8-10 章を学びます。エリシャの働きの最終部分に差しかかったと言えるでしょう。なぜなら、エリヤがやり残した働き、すなわちバアル信仰をイスラエルに導入させたアハブ家を滅ぼすエファーを神が立てられることを、神は前もってエリヤに告げておられました。それをエリシャが受け継ぎます。午後にこのことを詳しく学びますが、今朝は、8章 11-13 節に注目してください。

11 神の人は、彼が恥じるほど、じっと彼を見つめ、そして泣き出したので、12 ハザエルは尋ねた。「あなたさまは、なぜ泣くのですか。」エリシャは答えた。「私は、あなたがイスラエルの人々に害を加えようとしていることを知っているからだ。あなたは、彼らの要塞に火を放ち、その若い男たちを剣で切り殺し、幼子たちを八裂にし、妊婦たちを切り裂くだろう。」13 ハザエルは言った。「しもべは犬にすぎないのに、どうして、そんなたいそれたことができましょう。」しかし、エリシャは言った。「主は私に、あなたがアラムの王になると、示されたのだ。」

1A ハザエルの残虐性

この出来事は、預言者エリシャがダマスコに訪問した時にことです。アラムの王ベン・ハダデは、病気にかかっていました。エリシャがダマスコにいることを王は聞いたので、家来ハザエルに彼のところまで行かせて、この病気が治るかどうか聞いてくれと頼んだのです。かつて自分の配下にいる将軍ナアマンを、そのらい病を治していましたから、もしかしたら自分の病も治してくれるのでは、と思ったのでしょう。

けれどもハザエルが行くと、非常に困惑させる返事が来ました。10 節ですが、「行って、『あなたは必ず直る。』と彼に告げなさい。しかし、主は私に、彼が必ず死ぬことも示された。」病は治るの

になぜ死ななければいけないのか？と思いますよね。とても不思議です。14 節以降を読みますとその謎が解けますが、彼の病は直るはずだったのですが、ハザエル本人が王を窒息死させて殺してしまうのです。病で死ぬのではなく、殺害されてしまうのです。

このような残虐性をハザエルが持っているなど、誰も分からなかったでしょう。本人も分かりませんでした。しかしエリシャはそれを、主から与えられていた知識によって知っていました。自分の王を殺し、そして自身が王になってからイスラエルの領土を侵略していくこと、そしてその侵略で、要塞に火を放ち、若い男たちを剣で殺し、そして幼子を八裂きにし、妊婦たちを切り裂くことを、エリシャはすべて見えていました。ハザエルは、そんな大それたことが出来るのか、私は犬にすぎないのに、と答えました。彼はおとなしく、王に忠実な家来であったに違いありません。けれども、彼はエリシャから離れてから、その残虐性を露わにしていきます。

自分のことが自分で分からないという問題を、私たち人間は持っています。ギリシャの哲学者ソクラテスは「汝自身を知れ」と言いましたが、私たちにとっての最も難しい知識は自分についての知識です。詩篇 139 篇には、主が自分の座るのも、立つのも知っておられ、自分の心に思いつくことも、これから話そうとしている舌から出る言葉もすべて知っておられるので、「**そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高く、及びもつきません。(5 節)**」と言っています。そして自分のことを本当に知った時は、その知識は本当に痛々しく、辛いものであります。

2A 自己を知る難しさ

1B 心の邪悪さ

ハザエルのように、自分の心の邪悪さは本当に知り難いものです。エレミヤがいった言葉が大事です。「**人の心は何よりも陰陰で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。(エレミヤ 17:9)**」人間の根源には、この陰陰さ、あるいは邪悪があります。その悪はあまりにも深淵にあり知ることができません。

ニュースで出てくる事件で、おとなしそうに見える中学生や高校生が、暴力的な、凶悪的な犯罪を犯すことが頻繁にあります。その時に私が驚くのは、多くの人が「まさかこの学生が」という驚きの反応を見せることです。その前提には、「おとなしい子だから、そんな悪いことはしない。」という考えがあります。けれども実際は、おとなしい子だからこそ、健全な形で自分の怒りを表出していなかった歪んだ人格形成がなされている可能性が高いのです。そして、インターネットの掲示板で人の名誉を棄損する書き込みを行ない、たまに逮捕される人がいますね。そういった人々は大抵、普通の主婦であったり、OL やサラリーマンであったり、社会的にはなんら問題のない人々です。一見おとなしく、まともに見えるように見えるのですが、内側には強い残虐性、暴力性を持っているのです。

私たちは戦争などにおける残虐行為を聞いて、どのように思うべきでしょうか？私たちは同じよう

な環境にいたら、同じような残虐行為に踏み出していたかもしれないという戦慄を抱いて聞くべきです。なぜナチスドイツが、何百万ものユダヤ人を強制収容所の中で大量虐殺をすることができたのか、私たちは不思議に思います。けれども、良く調べると、その実行者であるナチスの幹部は、日々、その収容所の運営に指示を与えているのですが、帰宅すると子煩悩ぶりを発揮し、家族愛に満ちていた人々でした。アルゼンチンでイスラエルのモサドに捕まえられたアイヒマンも、彼が本人であると確認されたのは、妻の誕生日のための花束を買っていたからです。

このアイヒマンのことを考えながら、アメリカ人の心理学者が「アイヒマン実験」というものを行いました。さらに、「スタンフォード監獄実験」というものを行いました。それは、刑務所を舞台にして、普通の人々が特殊な肩書きや地位を与えられると、その役割に合わせて行動してしまう事を証明しようとした実験で、それは見事に証明、いや予測以上の結果でした。精神的に何ら疾患を持っていない、また過去の経歴で悪いことをしていない普通の人々が看守役になり、また囚人役になりましたが、看守は囚人に対して数々の虐待行為を行ない、囚人役の多くが精神錯乱をきたしたのです。

ある人は、人の心を「泥が底にたまっている井戸」に喩えました。その田舎にある井戸は、いつも冷たい水をたたえていましたが、底には泥がたまっていました。だから、普段はきれいな水も、石を投げ込んだり、蛙が飛び込んだりすると、泥が底から上がってきました。しばらく待って水を汲まなければいけません。同じように、人の心の底には泥が沈んでいると言えるのです。イエス様は言われました。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、・・(マルコ 7:20-22)」

2B 良く見せる性向

福音を信じるということは、このことを素直に認めて十字架の前に立つことです。自分の姿を正直に見つめて、「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら・・・(1ヨハネ 1:9)」とあるように、神の前に出て、その罪をそのまま言い表して、キリストの血と御霊によって洗い清めていただきます。

ところが、私たちはどうしても、自分の本当の姿を見せないようにします。それは、周りを攻撃することによって自分を守ろうとしますし、うんとも言わせないようにして見えぬ圧力を他者にかけることによって行うこともありますし、「私は、こうすべきだ」と自分に言い聞かせることによって行う場合もあります。「べきだ」という言葉は、キリスト者になってからも陥る罠であり、「自分をもっと他人を愛すべきだ」と思いながら、自分の心がどうなっているかを見つめようとしないのです。

私たちには、どうしても周りからよく見られようとする行動に移ってしまいます。実際よりも賢く見せようしたり、実際よりも霊的に見せようしたり、本当は祈っていないのに、あたかも祈っているかのように見せたり、外に対する働きかけを行なっています。実は私たちは、本来の性質がパリ

サイ派的であると言えます。つまり、「彼らのしていることはみな、人に見せるためです。(マタイ 23:5)」これがまさに、パリサイ派の人たちでありました。彼らの外側の行ないは立派でしたが、その真面目さの後ろに隠れている内面の汚れについては、気づこうともしませんでした。人に褒められたい、お金好き、慈しみにかけるなど、そういった心の奥のことからはないがしろにされました。

3B 自我と超自我

私たちは、他の人によく見られたいと思うばかりに、本当の自分さえ見えなくなるという、自分に対する盲目状態を作り出します。自分の中で理想状態の自分を作りあげていて、それが本当の自分であると思い込んでしまうのです。そのために、「自分はそれほど悪くはない」という自負心につながっています。

心理学の用語を借りますと、自分には、自我と超自我があります。自我とは本当の自分のことで、超自我というのは理想とする自分のことです。この間には大きな開きがあります。開きがあればあるほど、神経症に悩むことになると心理学者は言います。そこで、そのような心理学的カウンセリングを受けると、心理学カウンセリングでは、心理状態が安定することがその目的ですから、その理想の自分を引き下げ、本当の自分に近づけることを行なうのです。「そんなに苛立たしいのであれば、一度、怒ってみるのよ。」と、私たちも何気にアドバイスしたりしませんか？これが心理学的アプローチです。

イエス様はどうだったでしょうか？その反対です。「あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。(マタイ 5:48)」と言われました。主は私たちに、自我を超自我に引き上げるように呼びかけておられます。あるべき自分があるけれども、本当の自分を変えられて、そのあるべき自分に近づいていくように呼びかけておられます。そして、それができるように主は積極的に働きかけてくださいます。

私たちには絶対にできません。けれども、神がキリストにあってそれを可能にしてくださいました。イエス様はご自身が十字架につけられることによって、それを可能にされました。私たちの古い人、その自我を釘づけにしてくださいました。そのことによって、よみがえったご自身が私たちのうちに生きてくださって、ご自身が私たちの内で働いて、私たちを通して事を行なわれることを選ばれたのです。このことをパウロが言いました。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。(ガラテヤ 2:20)」

そして、それは心の刷新と変革によって与えられます。新しい契約について、主はエゼキエルにこう教えられました。「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあな

たがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。(エゼキエル 36:26-27)」石のようにかたくなな心を、主ご自身が肉の心に変えてくださり、それで神の命令を守ることができるようにして下さいます。これは神の霊が与えられるからです。

3A 自己を知る必要性

1B 回復の始まり

ですから神は、いつも理想の自分と現実の自分の間に悩む私たちに、福音を与えてくださっています。私たちがしなければいけないことは、まずは、自分をごまかすことを止めることです。自分には問題があることを認めることです。自分には罪があることを認めることです。これは、とても痛々しい経験です。けれども、これを通らなければ、その後の変化を期待することはできません。

何かの中毒になっている人が、回復する第一歩は、自分が中毒になっていることを認めるところから始まります。もし認めることができたなら、九割は回復する可能性が出てきたとすることができるでしょう。自分の本当の姿に気づくことが大きな戦いなのです。アルコール中毒の人は「これで最後の一杯にする。」と決めて飲みますが、飲むたびに「最後の一杯にする」と言い続けます。同じように、自分に問題がないと思っている間は、その問題を継続して行ってしまうのです。

2B 罪の告白

「自分にごまかしてはいけません」ことをしっかりと教えているのは、ヨハネの第一の手紙であります。1章 5-7節までまず読みます。「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。もし私たちが、神と交わりがあると断言しながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを断言しているのであって、真理を行ってはいけません。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。(1ヨハネ 1:5-7)」もし私たちが、自分に越えられない弱さや欠点、聖書で罪と言われているものがあるのに、その問題に直視しないで、それで「でも、私はクリスチャン。神さまとの交わりがある。」と言ったら、それは嘘だ、と言っています。神の救いは受けているかもしれない。けれども、神との交わりは断ち切られています。

ですから、神が光であられるように、自分も光の中を歩まなければいけません。けれども、それはどのようにすればよいのか？次を読みましょう。「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。(8-10節)」

二つの嘘をヨハネは教えています。一つは、「罪はない」と言う嘘です。自分は本質的には悪い

ことをしていないが、特殊な関係にいたからそのような悪いことをしてしまったのだ、というようなことを言ったら、それは、罪はないと言っていることです。いいえ、本質的に罪人だから、環境はきつかけになったでしょうが、本当の自分が露わになっただけです。もう一つは、「罪を犯していない」ということです。神の律法に照らして罪を犯したのに、そうではないと言い張るなら、「神よ、お前が間違っている」と言っているに過ぎない、神を偽り者にしている、ということです。

この二つの嘘をやめて、私たちが真実に自分の罪を言い表すなら、どう書いていますか、「神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」と約束してくださっています。これこそが福音、良い知らせです。

3B 神の啓示

ですから私たちの祈りには、ダビデの祈った祈りが必要になります。「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。(詩篇 139:23-24)」私が自分を知ることができません。だから、主ご自身が自分の本当の姿を啓示してくださるよう、自分を調べてくださるよう祈るのです。

聖霊がそのまま教えてくださる時があります。また、主が試みを与えてくださる時があります。イスラエルの民が荒野の旅をしたのは、彼ら自身が自分を知るためであったことを主は話しておられます。「あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。(申命記 8:2)」私たちが試練を受ける時に、それは神が私たちの心を知りたいと思われているからではありません。神は初めから私たちの心にあるものをすべて、ことごとくご存知です。そうではなく、私たちが自分自身をそれらの試みによって知ることができるようにするためであります。そのことによって、自分自身に頼らず、もっぱら主によってのみ生きるようにさせるのです。

どうか、主の前で素の自分に戻りましょう。主がその自分を洗い清め、癒し、そのありのままを受け入れてくださいます。主はイスラエルを虫けらと呼んでおられ、その虫けらを助け、救ってくださると言われています。「恐れるな。虫けらのヤコブ、イスラエルの人々。わたしはあなたを助ける。…主の御告げ。…あなたを贖う者はイスラエルの聖なる者。(イザヤ 41:14)」人を虫けらと呼ぶとは何様だ！といらだたしくなるかもしれませんが、私たちが本当の自分に出会った時、自分は虫けらでもうだめだ、と思うとき、主は助け、憐れんでくださるのです。

2列王記8章 11-13 節 「自分を知る」

1A ハザエルの残虐性

2A 自己を知る難しさ

1B 心の邪悪さ

2B 良く見せる性向

3B 自我と超自我

3A 自己を知る必要性

1B 回復の始まり

2B 罪の告白

3B 神の啓示

本文

列王記第二8章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは先週で7章まで来ました。預言者エリシャの働きを眺めています、今日の午後は 8-10 章を学びます。エリシャの働きの最終部分に差しかかったと言えるでしょう。なぜなら、エリヤがやり残した働き、すなわちバアル信仰をイスラエルに導入させたアハブ家を滅ぼすエファーを神が立てられることを、神は前もってエリヤに告げておられました。それをエリシャが受け継ぎます。午後にこのことを詳しく学びますが、今朝は、8章 11-13 節に注目してください。

11 神の人は、彼が恥じるほど、じっと彼を見つめ、そして泣き出したので、12 ハザエルは尋ねた。「あなたさまは、なぜ泣くのですか。」エリシャは答えた。「私は、あなたがイスラエルの人々に害を加えようとしていることを知っているからだ。あなたは、彼らの要塞に火を放ち、その若い男たちを剣で切り殺し、幼子たちを八裂にし、妊婦たちを切り裂くだろう。」13 ハザエルは言った。「しもべは犬にすぎないのに、どうして、そんなたいそれたことができましょう。」しかし、エリシャは言った。「主は私に、あなたがアラムの王になると、示されたのだ。」

1A ハザエルの残虐性

この出来事は、預言者エリシャがダマスコに訪問した時にことです。アラムの王ベン・ハダデは、病気にかかっていました。エリシャがダマスコにいることを王は聞いたので、家来ハザエルに彼のところまで行かせて、この病気が治るかどうか聞いてくれと頼んだのです。かつて自分の配下にいる将軍ナアマンを、そのらい病を治していましたから、もしかしたら自分の病も治してくれるのでは、と思ったのでしょう。

けれどもハザエルが行くと、非常に困惑させる返事が来ました。10 節ですが、「行って、『あなたは必ず直る。』と彼に告げなさい。しかし、主は私に、彼が必ず死ぬことも示された。」病は治るの

になぜ死ななければいけないのか？と思いますよね。とても不思議です。14 節以降を読みますとその謎が解けますが、彼の病は直るはずだったのですが、ハザエル本人が王を窒息死させて殺してしまうのです。病で死ぬのではなく、殺害されてしまうのです。

このような残虐性をハザエルが持っているなど、誰も分からなかったでしょう。本人も分かりませんでした。しかしエリシャはそれを、主から与えられていた知識によって知っていました。自分の王を殺し、そして自身が王になってからイスラエルの領土を侵略していくこと、そしてその侵略で、要塞に火を放ち、若い男たちを剣で殺し、そして幼子を八裂きにし、妊婦たちを切り裂くことを、エリシャはすべて見えていました。ハザエルは、そんな大それたことが出来るのか、私は犬にすぎないのに、と答えました。彼はおとなしく、王に忠実な家来であったに違いありません。けれども、彼はエリシャから離れてから、その残虐性を露わにしていきます。

自分のことが自分で分からないという問題を、私たち人間は持っています。ギリシャの哲学者ソクラテスは「汝自身を知れ」と言いましたが、私たちにとっての最も難しい知識は自分についての知識です。詩篇 139 篇には、主が自分の座るのも、立つのも知っておられ、自分の心に思いつくことも、これから話そうとしている舌から出る言葉もすべて知っておられるので、「**そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高く、及びもつきません。(5 節)**」と言っています。そして自分のことを本当に知った時は、その知識は本当に痛々しく、辛いものであります。

2A 自己を知る難しさ

1B 心の邪悪さ

ハザエルのように、自分の心の邪悪さは本当に知り難いものです。エレミヤがいった言葉が大事です。「**人の心は何よりも陰陰で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。(エレミヤ 17:9)**」人間の根源には、この陰陰さ、あるいは邪悪があります。その悪はあまりにも深淵にあり知ることができません。

ニュースで出てくる事件で、おとなしそうに見える中学生や高校生が、暴力的な、凶悪的な犯罪を犯すことが頻繁にあります。その時に私が驚くのは、多くの人が「まさかこの学生が」という驚きの反応を見せることです。その前提には、「おとなしい子だから、そんな悪いことはしない。」という考えがあります。けれども実際は、おとなしい子だからこそ、健全な形で自分の怒りを出ししていなかった歪んだ人格形成がなされている可能性が高いのです。そして、インターネットの掲示板で人の名誉を棄損する書き込みを行ない、たまに逮捕される人がいますね。そういった人々は大抵、普通の主婦であったり、OL やサラリーマンであったり、社会的にはなんら問題のない人々です。一見おとなしく、まともに見えるように見えるのですが、内側には強い残虐性、暴力性を持っているのです。

私たちは戦争などにおける残虐行為を聞いて、どのように思うべきでしょうか？私たちは同じよう

な環境にいたら、同じような残虐行為に踏み出していたかもしれないという戦慄を抱いて聞くべきです。なぜナチスドイツが、何百万ものユダヤ人を強制収容所の中で大量虐殺をすることができたのか、私たちは不思議に思います。けれども、良く調べると、その実行者であるナチスの幹部は、日々、その収容所の運営に指示を与えているのですが、帰宅すると子煩悩ぶりを発揮し、家族愛に満ちていた人々でした。アルゼンチンでイスラエルのモサドに捕まえられたアイヒマンも、彼が本人であると確認されたのは、妻の誕生日のための花束を買っていたからです。

このアイヒマンのことを考えながら、アメリカ人の心理学者が「アイヒマン実験」というものを行いました。さらに、「スタンフォード監獄実験」というものを行いました。それは、刑務所を舞台にして、普通の人々が特殊な肩書きや地位を与えられると、その役割に合わせて行動してしまう事を証明しようとした実験で、それは見事に証明、いや予測以上の結果でした。精神的に何ら疾患を持っていない、また過去の経歴で悪いことをしていない普通の人々が看守役になり、また囚人役になりましたが、看守は囚人に対して数々の虐待行為を行ない、囚人役の多くが精神錯乱をきたしたのです。

ある人は、人の心を「泥が底にたまっている井戸」に喩えました。その田舎にある井戸は、いつも冷たい水をたたえていましたが、底には泥がたまっていました。だから、普段はきれいな水も、石を投げ込んだり、蛙が飛び込んだりすると、泥が底から上がってきました。しばらく待って水を汲まなければいけません。同じように、人の心の底には泥が沈んでいると言えるのです。イエス様は言われました。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そして、高ぶり、愚かさであり、・・(マルコ 7:20-22)」

2B 良く見せる性向

福音を信じるということは、このことを素直に認めて十字架の前に立つことです。自分の姿を正直に見つめて、「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら・・・(1ヨハネ 1:9)」とあるように、神の前に出て、その罪をそのまま言い表して、キリストの血と御霊によって洗い清めていただきます。

ところが、私たちはどうしても、自分の本当の姿を見せないようにします。それは、周りを攻撃することによって自分を守ろうとしますし、うんとも言わせないようにして見えぬ圧力を他者にかけることによって行うこともありますし、「私は、こうすべきだ」と自分に言い聞かせることによって行う場合もあります。「べきだ」という言葉は、キリスト者になってからも陥る罠であり、「自分をもっと他人を愛すべきだ」と思いながら、自分の心がどうなっているかを見つめようとしません。

私たちには、どうしても周りからよく見られようとする行動に移ってしまいます。実際よりも賢く見せようしたり、実際よりも霊的に見せようしたり、本当は祈っていないのに、あたかも祈っているかのように見せたり、外に対する働きかけを行なっています。実は私たちは、本来の性質がパリ

サイ派的であると言えます。つまり、「彼らのしていることはみな、人に見せるためです。(マタイ 23:5)」これがまさに、パリサイ派の人たちでありました。彼らの外側の行ないは立派でしたが、その真面目さの後ろに隠れている内面の汚れについては、気づこうともしませんでした。人に褒められたい、お金好き、慈しみにかけるなど、そういった心の奥のことからはないがしろにされました。

3B 自我と超自我

私たちは、他の人によく見られたいと思うばかりに、本当の自分さえ見えなくなるという、自分に対する盲目状態を作り出します。自分の中で理想状態の自分を作りあげていて、それが本当の自分であると思い込んでしまうのです。そのために、「自分はそれほど悪くはない」という自負心につながっています。

心理学の用語を借りますと、自分には、自我と超自我があります。自我とは本当の自分のことで、超自我というのは理想とする自分のことです。この間には大きな開きがあります。開きがあればあるほど、神経症に悩むことになると心理学者は言います。そこで、そのような心理学的カウンセリングを受けると、心理学カウンセリングでは、心理状態が安定することがその目的ですから、その理想の自分を引き下げ、本当の自分に近づけることを行なうのです。「そんなに苛立たしいのであれば、一度、怒ってみるのよ。」と、私たちも何気にアドバイスしたりしませんか？これが心理学的アプローチです。

イエス様はどうだったでしょうか？その反対です。「あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。(マタイ 5:48)」と言われました。主は私たちに、自我を超自我に引き上げるように呼びかけておられます。あるべき自分があるけれども、本当の自分を変えられて、そのあるべき自分に近づいていくように呼びかけておられます。そして、それができるように主は積極的に働きかけてくださいます。

私たちには絶対にできません。けれども、神がキリストにあってそれを可能にしてくださいました。イエス様はご自身が十字架につけられることによって、それを可能にされました。私たちの古い人、その自我を釘づけにしてくださいました。そのことによって、よみがえったご自身が私たちのうちに生きてくださって、ご自身が私たちの内で働いて、私たちを通して事を行なわれることを選ばれたのです。このことをパウロが言いました。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。(ガラテヤ 2:20)」

そして、それは心の刷新と変革によって与えられます。新しい契約について、主はエゼキエルにこう教えられました。「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなた

たがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。(エゼキエル 36:26-27)」石のようにかたくなな心を、主ご自身が肉の心に変えてくださり、それで神の命令を守ることができるようにして下さいます。これは神の霊が与えられるからです。

3A 自己を知る必要性

1B 回復の始まり

ですから神は、いつも理想の自分と現実の自分の間に悩む私たちに、福音を与えてくださっています。私たちがしなければいけないことは、まずは、自分をごまかすことを止めることです。自分には問題があることを認めることです。自分には罪があることを認めることです。これは、とても痛々しい経験です。けれども、これを通らなければ、その後の変化を期待することはできません。

何かの中毒になっている人が、回復する第一歩は、自分が中毒になっていることを認めるところから始まります。もし認めることができたなら、九割は回復する可能性が出てきたとすることができるでしょう。自分の本当の姿に気づくことが大きな戦いなのです。アルコール中毒の人は「これで最後の一杯にする。」と決めて飲みますが、飲むたびに「最後の一杯にする」と言い続けます。同じように、自分に問題がないと思っている間は、その問題を継続して行ってしまうのです。

2B 罪の告白

「自分にごまかしてはいけません」ことをしっかりと教えているのは、ヨハネの第一の手紙であります。1章 5-7節までまず読みます。「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。もし私たちが、神と交わりがあると断言しながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを断言しているのであって、真理を行ってはいけません。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。(1ヨハネ 1:5-7)」もし私たちが、自分に越えられない弱さや欠点、聖書で罪と言われているものがあるのに、その問題に直視しないで、それで「でも、私はクリスチャン。神さまとの交わりがある。」と言ったら、それは嘘だ、と言っています。神の救いは受けているかもしれない。けれども、神との交わりは断ち切られています。

ですから、神が光であられるように、自分も光の中を歩まなければいけません。けれども、それはどのようにすればよいのか？次を読みましょう。「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。(8-10節)」

二つの嘘をヨハネは教えています。一つは、「罪はない」と言う嘘です。自分は本質的には悪い

ことをしていないが、特殊な関係にいたからそのような悪いことをしてしまったのだ、というようなことを言ったら、それは、罪はないと言っていることです。いいえ、本質的に罪人だから、環境はきっかけになったでしょうが、本当の自分が露わになっただけです。もう一つは、「罪を犯していない」ということです。神の律法に照らして罪を犯したのに、そうではないと言い張るなら、「神よ、お前が間違っている」と言っているに過ぎない、神を偽り者にしている、ということです。

この二つの嘘をやめて、私たちが真実に自分の罪を言い表すなら、どう書いていますか、「**神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。**」と約束してくださっています。これこそが福音、良い知らせです。

3B 神の啓示

ですから私たちの祈りには、ダビデの祈った祈りが必要になります。「**神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。(詩篇 139:23-24)**」私が自分を知ることができません。だから、主ご自身が自分の本当の姿を啓示してくださるよう、自分を調べてくださるよう祈るのです。

聖霊がそのまま教えてくださる時があります。また、主が試みを与えてくださる時があります。イスラエルの民が荒野の旅をしたのは、彼ら自身が自分を知るためであったことを主は話しておられます。「**あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。(申命記 8:2)**」私たちが試練を受ける時に、それは神が私たちの心を知りたいと思われているからではありません。神は初めから私たちの心にあるものをすべて、ことごとくご存知です。そうではなく、私たちが自分自身をそれらの試みによって知ることができるようにするためであります。そのことによって、自分自身に頼らず、もっぱら主によってのみ生きるようにさせるのです。

どうか、主の前で素の自分に戻りましょう。主がその自分を洗い清め、癒し、そのありのままを受け入れてくださいます。主はイスラエルを虫けらと呼んでおられ、その虫けらを助け、救ってくださると言われています。「**恐れるな。虫けらのヤコブ、イスラエルの人々。わたしはあなたを助ける。…主の御告げ。…あなたを贖う者はイスラエルの聖なる者。(イザヤ 41:14)**」人を虫けらと呼ぶとは何様だ！といらだたしくなるかもしれませんが、私たちが本当の自分に出会った時、自分は虫けらでもうだめだ、と思うとき、主は助け、憐れんでくださるのです。

2列王記8章 11-13 節 「自分を知る」

1A ハザエルの残虐性

2A 自己を知る難しさ

1B 心の邪悪さ

2B 良く見せる性向

3B 自我と超自我

3A 自己を知る必要性

1B 回復の始まり

2B 罪の告白

3B 神の啓示

本文

列王記第二8章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは先週で7章まで来ました。預言者エリシャの働きを眺めています、今日の午後は 8-10 章を学びます。エリシャの働きの最終部分に差しかかったと言えるでしょう。なぜなら、エリヤがやり残した働き、すなわちバアル信仰をイスラエルに導入させたアハブ家を滅ぼすエファーを神が立てられることを、神は前もってエリヤに告げておられました。それをエリシャが受け継ぎます。午後にこのことを詳しく学びますが、今朝は、8章 11-13 節に注目してください。

11 神の人は、彼が恥じるほど、じっと彼を見つめ、そして泣き出したので、12 ハザエルは尋ねた。「あなたさまは、なぜ泣くのですか。」エリシャは答えた。「私は、あなたがイスラエルの人々に害を加えようとしていることを知っているからだ。あなたは、彼らの要塞に火を放ち、その若い男たちを剣で切り殺し、幼子たちを八裂にし、妊婦たちを切り裂くだろう。」13 ハザエルは言った。「しもべは犬にすぎないのに、どうして、そんなたいそれたことができましょう。」しかし、エリシャは言った。「主は私に、あなたがアラムの王になると、示されたのだ。」

1A ハザエルの残虐性

この出来事は、預言者エリシャがダマスコに訪問した時にことです。アラムの王ベン・ハダデは、病気にかかっていました。エリシャがダマスコにいることを王は聞いたので、家来ハザエルに彼のところまで行かせて、この病気が治るかどうか聞いてくれと頼んだのです。かつて自分の配下にいる将軍ナアマンを、そのらい病を治していましたから、もしかしたら自分の病も治してくれるのでは、と思ったのでしょう。

けれどもハザエルが行くと、非常に困惑させる返事が来ました。10 節ですが、「行って、『あなたは必ず直る。』と彼に告げなさい。しかし、主は私に、彼が必ず死ぬことも示された。」病は治るの

になぜ死ななければいけないのか？と思いますよね。とても不思議です。14 節以降を読みますとその謎が解けますが、彼の病は直るはずだったのですが、ハザエル本人が王を窒息死させて殺してしまうのです。病で死ぬのではなく、殺害されてしまうのです。

このような残虐性をハザエルが持っているなど、誰も分からなかったでしょう。本人も分かりませんでした。しかしエリシャはそれを、主から与えられていた知識によって知っていました。自分の王を殺し、そして自身が王になってからイスラエルの領土を侵略していくこと、そしてその侵略で、要塞に火を放ち、若い男たちを剣で殺し、そして幼子を八裂きにし、妊婦たちを切り裂くことを、エリシャはすべて見えていました。ハザエルは、そんな大それたことが出来るのか、私は犬にすぎないのに、と答えました。彼はおとなしく、王に忠実な家来であったに違いありません。けれども、彼はエリシャから離れてから、その残虐性を露わにしていきます。

自分のことが自分で分からないという問題を、私たち人間は持っています。ギリシャの哲学者ソクラテスは「汝自身を知れ」と言いましたが、私たちにとっての最も難しい知識は自分についての知識です。詩篇 139 篇には、主が自分の座るのも、立つのも知っておられ、自分の心に思いつくことも、これから話そうとしている舌から出る言葉もすべて知っておられるので、「**そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高く、及びもつきません。(5 節)**」と言っています。そして自分のことを本当に知った時は、その知識は本当に痛々しく、辛いものであります。

2A 自己を知る難しさ

1B 心の邪悪さ

ハザエルのように、自分の心の邪悪さは本当に知り難いものです。エレミヤがいった言葉が大事です。「**人の心は何よりも陰陰で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。(エレミヤ 17:9)**」人間の根源には、この陰陰さ、あるいは邪悪があります。その悪はあまりにも深淵にあり知ることができません。

ニュースで出てくる事件で、おとなしそうに見える中学生や高校生が、暴力的な、凶悪的な犯罪を犯すことが頻繁にあります。その時に私が驚くのは、多くの人が「まさかこの学生が」という驚きの反応を見せることです。その前提には、「おとなしい子だから、そんな悪いことはしない。」という考えがあります。けれども実際は、おとなしい子だからこそ、健全な形で自分の怒りを出ししていなかった歪んだ人格形成がなされている可能性が高いのです。そして、インターネットの掲示板で人の名誉を棄損する書き込みを行ない、たまに逮捕される人がいますね。そういった人々は大抵、普通の主婦であったり、OL やサラリーマンであったり、社会的にはなんら問題のない人々です。一見おとなしく、まともに見えるように見えるのですが、内側には強い残虐性、暴力性を持っているのです。

私たちは戦争などにおける残虐行為を聞いて、どのように思うべきでしょうか？私たちは同じよう

な環境にいたら、同じような残虐行為に踏み出していたかもしれないという戦慄を抱いて聞くべきです。なぜナチスドイツが、何百万ものユダヤ人を強制収容所の中で大量虐殺をすることができたのか、私たちは不思議に思います。けれども、良く調べると、その実行者であるナチスの幹部は、日々、その収容所の運営に指示を与えているのですが、帰宅すると子煩悩ぶりを発揮し、家族愛に満ちていた人々でした。アルゼンチンでイスラエルのモサドに捕まえられたアイヒマンも、彼が本人であると確認されたのは、妻の誕生日のための花束を買っていたからです。

このアイヒマンのことを考えながら、アメリカ人の心理学者が「アイヒマン実験」というものを行いました。さらに、「スタンフォード監獄実験」というものを行いました。それは、刑務所を舞台にして、普通の人々が特殊な肩書きや地位を与えられると、その役割に合わせて行動してしまう事を証明しようとした実験で、それは見事に証明、いや予測以上の結果でした。精神的に何ら疾患を持っていない、また過去の経歴で悪いことをしていない普通の人々が看守役になり、また囚人役になりましたが、看守は囚人に対して数々の虐待行為を行ない、囚人役の多くが精神錯乱をきたしたのです。

ある人は、人の心を「泥が底にたまっている井戸」に喩えました。その田舎にある井戸は、いつも冷たい水をたたえていましたが、底には泥がたまっていました。だから、普段はきれいな水も、石を投げ込んだり、蛙が飛び込んだりすると、泥が底から上がってきました。しばらく待って水を汲まなければいけません。同じように、人の心の底には泥が沈んでいると言えるのです。イエス様は言われました。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そして、高ぶり、愚かさであり、・・(マルコ 7:20-22)」

2B 良く見せる性向

福音を信じるということは、このことを素直に認めて十字架の前に立つことです。自分の姿を正直に見つめて、「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら・・・(1ヨハネ 1:9)」とあるように、神の前に出て、その罪をそのまま言い表して、キリストの血と御霊によって洗い清めていただきます。

ところが、私たちはどうしても、自分の本当の姿を見せないようにします。それは、周りを攻撃することによって自分を守ろうとしますし、うんとも言わせないようにして見えぬ圧力を他者にかけることによって行うこともありますし、「私は、こうすべきだ」と自分に言い聞かせることによって行う場合もあります。「べきだ」という言葉は、キリスト者になってからも陥る罠であり、「自分をもっと他人を愛すべきだ」と思いながら、自分の心がどうなっているかを見つめようとしないのです。

私たちには、どうしても周りからよく見られようとする行動に移ってしまいます。実際よりも賢く見せようしたり、実際よりも霊的に見せようしたり、本当は祈っていないのに、あたかも祈っているかのように見せたり、外に対する働きかけを行なっています。実は私たちは、本来の性質がパリ

サイ派的であると言えます。つまり、「彼らのしていることはみな、人に見せるためです。(マタイ 23:5)」これがまさに、パリサイ派の人たちでありました。彼らの外側の行ないは立派でしたが、その真面目さの後ろに隠れている内面の汚れについては、気づこうともしませんでした。人に褒められたい、お金好き、慈しみにかけるなど、そういった心の奥のことからはないがしろにされました。

3B 自我と超自我

私たちは、他の人によく見られたいと思うばかりに、本当の自分さえ見えなくなるという、自分に対する盲目状態を作り出します。自分の中で理想状態の自分を作りあげていて、それが本当の自分であると思い込んでしまうのです。そのために、「自分はそれほど悪くはない」という自負心につながっています。

心理学の用語を借りますと、自分には、自我と超自我があります。自我とは本当の自分のことで、超自我というのは理想とする自分のことです。この間には大きな開きがあります。開きがあればあるほど、神経症に悩むことになると心理学者は言います。そこで、そのような心理学的カウンセリングを受けると、心理学カウンセリングでは、心理状態が安定することがその目的ですから、その理想の自分を引き下げ、本当の自分に近づけることを行なうのです。「そんなに苛立たしいのであれば、一度、怒ってみるのよ。」と、私たちも何気にアドバイスしたりしませんか？これが心理学的アプローチです。

イエス様はどうだったでしょうか？その反対です。「あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。(マタイ 5:48)」と言われました。主は私たちに、自我を超自我に引き上げるように呼びかけておられます。あるべき自分があるけれども、本当の自分を変えられて、そのあるべき自分に近づいていくように呼びかけておられます。そして、それができるように主は積極的に働きかけてくださいます。

私たちには絶対にできません。けれども、神がキリストにあってそれを可能にしてくださいました。イエス様はご自身が十字架につけられることによって、それを可能にされました。私たちの古い人、その自我を釘づけにしてくださいました。そのことによって、よみがえったご自身が私たちのうちに生きてくださって、ご自身が私たちの内で働いて、私たちを通して事を行なわれることを選ばれたのです。このことをパウロが言いました。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。(ガラテヤ 2:20)」

そして、それは心の刷新と変革によって与えられます。新しい契約について、主はエゼキエルにこう教えられました。「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなた

たがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。(エゼキエル 36:26-27)」石のようにかたくなな心を、主ご自身が肉の心に変えてくださり、それで神の命令を守ることができるようにしてください。これは神の霊が与えられるからです。

3A 自己を知る必要性

1B 回復の始まり

ですから神は、いつも理想の自分と現実の自分の間に悩む私たちに、福音を与えてくださっています。私たちがしなければいけないことは、まずは、自分をごまかすことを止めることです。自分には問題があることを認めることです。自分には罪があることを認めることです。これは、とても痛々しい経験です。けれども、これを通らなければ、その後の変化を期待することはできません。

何かの中毒になっている人が、回復する第一歩は、自分が中毒になっていることを認めることから始まります。もし認めることができたなら、九割は回復する可能性が出てきたとすることができるでしょう。自分の本当の姿に気づくことが大きな戦いなのです。アルコール中毒の人は「これで最後の一杯にする。」と決めて飲みますが、飲むたびに「最後の一杯にする」と言い続けます。同じように、自分に問題がないと思っている間は、その問題を継続して行ってしまうのです。

2B 罪の告白

「自分にごまかしてはいけません」ことをしっかりと教えているのは、ヨハネの第一の手紙であります。1章 5-7節までまず読みます。「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。もし私たちが、神と交わりがあると断言しながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを断言しているのであって、真理を行ってはいけません。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。(1ヨハネ 1:5-7)」もし私たちが、自分に越えられない弱さや欠点、聖書で罪と言われているものがあるのに、その問題に直視しないで、それで「でも、私はクリスチャン。神さまとの交わりがある。」と言ったら、それは嘘だ、と言っています。神の救いは受けているかもしれない。けれども、神との交わりは断ち切られています。

ですから、神が光であられるように、自分も光の中を歩まなければいけません。けれども、それはどのようにすればよいのか？次を読みましょう。「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。(8-10節)」

二つの嘘をヨハネは教えています。一つは、「罪はない」と言う嘘です。自分は本質的には悪い

ことをしていないが、特殊な関係にいたからそのような悪いことをしてしまったのだ、というようなことを言ったら、それは、罪はないと言っていることです。いいえ、本質的に罪人だから、環境はきっかけになったでしょうが、本当の自分が露わになっただけです。もう一つは、「罪を犯していない」ということです。神の律法に照らして罪を犯したのに、そうではないと言い張るなら、「神よ、お前が間違っている」と言っているに過ぎない、神を偽り者にしている、ということです。

この二つの嘘をやめて、私たちが真実に自分の罪を言い表すなら、どう書いていますか、「神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」と約束してくださっています。これこそが福音、良い知らせです。

3B 神の啓示

ですから私たちの祈りには、ダビデの祈った祈りが必要になります。「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。(詩篇 139:23-24)」私が自分を知ることができません。だから、主ご自身が自分の本当の姿を啓示してくださるよう、自分を調べてくださるよう祈るのです。

聖霊がそのまま教えてくださる時があります。また、主が試みを与えてくださる時があります。イスラエルの民が荒野の旅をしたのは、彼ら自身が自分を知るためであったことを主は話しておられます。「あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。(申命記 8:2)」私たちが試練を受ける時に、それは神が私たちの心を知りたいと思われているからではありません。神は初めから私たちの心にあるものをすべて、ことごとくご存知です。そうではなく、私たちが自分自身をそれらの試みによって知ることができるようにするためであります。そのことによって、自分自身に頼らず、もっぱら主によってのみ生きるようにさせるのです。

どうか、主の前で素の自分に戻りましょう。主がその自分を洗い清め、癒し、そのありのままを受け入れてくださいます。主はイスラエルを虫けらと呼んでおられ、その虫けらを助け、救ってくださると言われています。「恐れるな。虫けらのヤコブ、イスラエルの人々。わたしはあなたを助ける。…主の御告げ。…あなたを贖う者はイスラエルの聖なる者。(イザヤ 41:14)」人を虫けらと呼ぶとは何様だ！といらだたしくなるかもしれませんが、私たちが本当の自分に出会った時、自分は虫けらでもうだめだ、と思うとき、主は助け、憐れんでくださるのです。

2列王記8章 11-13 節 「自分を知る」

1A ハザエルの残虐性

2A 自己を知る難しさ

1B 心の邪悪さ

2B 良く見せる性向

3B 自我と超自我

3A 自己を知る必要性

1B 回復の始まり

2B 罪の告白

3B 神の啓示

本文

列王記第二8章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは先週で7章まで来ました。預言者エリシャの働きを眺めています、今日の午後は 8-10 章を学びます。エリシャの働きの最終部分に差しかかったと言えるでしょう。なぜなら、エリヤがやり残した働き、すなわちバアル信仰をイスラエルに導入させたアハブ家を滅ぼすエファーを神が立てられることを、神は前もってエリヤに告げておられました。それをエリシャが受け継ぎます。午後にこのことを詳しく学びますが、今朝は、8章 11-13 節に注目してください。

11 神の人は、彼が恥じるほど、じっと彼を見つめ、そして泣き出したので、12 ハザエルは尋ねた。「あなたさまは、なぜ泣くのですか。」エリシャは答えた。「私は、あなたがイスラエルの人々に害を加えようとしていることを知っているからだ。あなたは、彼らの要塞に火を放ち、その若い男たちを剣で切り殺し、幼子たちを八裂にし、妊婦たちを切り裂くだろう。」13 ハザエルは言った。「しもべは犬にすぎないのに、どうして、そんなたいそれたことができましょう。」しかし、エリシャは言った。「主は私に、あなたがアラムの王になると、示されたのだ。」

1A ハザエルの残虐性

この出来事は、預言者エリシャがダマスコに訪問した時にことです。アラムの王ベン・ハダデは、病気にかかっていました。エリシャがダマスコにいることを王は聞いたので、家来ハザエルに彼のところまで行かせて、この病気が治るかどうか聞いてくれと頼んだのです。かつて自分の配下にいる将軍ナアマンを、そのらい病を治していましたから、もしかしたら自分の病も治してくれるのでは、と思ったのでしょう。

けれどもハザエルが行くと、非常に困惑させる返事が来ました。10 節ですが、「行って、『あなたは必ず直る。』と彼に告げなさい。しかし、主は私に、彼が必ず死ぬことも示された。」病は治るの

になぜ死ななければいけないのか？と思いますよね。とても不思議です。14 節以降を読みますとその謎が解けますが、彼の病は直るはずだったのですが、ハザエル本人が王を窒息死させて殺してしまうのです。病で死ぬのではなく、殺害されてしまうのです。

このような残虐性をハザエルが持っているなど、誰も分からなかったでしょう。本人も分かりませんでした。しかしエリシャはそれを、主から与えられていた知識によって知っていました。自分の王を殺し、そして自身が王になってからイスラエルの領土を侵略していくこと、そしてその侵略で、要塞に火を放ち、若い男たちを剣で殺し、そして幼子を八裂きにし、妊婦たちを切り裂くことを、エリシャはすべて見えていました。ハザエルは、そんな大それたことが出来るのか、私は犬にすぎないのに、と答えました。彼はおとなしく、王に忠実な家来であったに違いありません。けれども、彼はエリシャから離れてから、その残虐性を露わにしていきます。

自分のことが自分で分からないという問題を、私たち人間は持っています。ギリシャの哲学者ソクラテスは「汝自身を知れ」と言いましたが、私たちにとっての最も難しい知識は自分についての知識です。詩篇 139 篇には、主が自分の座るのも、立つのも知っておられ、自分の心に思いつくことも、これから話そうとしている舌から出る言葉もすべて知っておられるので、「**そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高く、及びもつきません。(5 節)**」と言っています。そして自分のことを本当に知った時は、その知識は本当に痛々しく、辛いものであります。

2A 自己を知る難しさ

1B 心の邪悪さ

ハザエルのように、自分の心の邪悪さは本当に知り難いものです。エレミヤがいった言葉が大事です。「**人の心は何よりも陰陰で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。(エレミヤ 17:9)**」人間の根源には、この陰陰さ、あるいは邪悪があります。その悪はあまりにも深淵にあり知ることができません。

ニュースで出てくる事件で、おとなしそうに見える中学生や高校生が、暴力的な、凶悪的な犯罪を犯すことが頻繁にあります。その時に私が驚くのは、多くの人が「まさかこの学生が」という驚きの反応を見せることです。その前提には、「おとなしい子だから、そんな悪いことはしない。」という考えがあります。けれども実際は、おとなしい子だからこそ、健全な形で自分の怒りを表出していなかった歪んだ人格形成がなされている可能性が高いのです。そして、インターネットの掲示板で人の名誉を棄損する書き込みを行ない、たまに逮捕される人がいますね。そういった人々は大抵、普通の主婦であったり、OL やサラリーマンであったり、社会的にはなんら問題のない人々です。一見おとなしく、まともに見えるように見えるのですが、内側には強い残虐性、暴力性を持っているのです。

私たちは戦争などにおける残虐行為を聞いて、どのように思うべきでしょうか？私たちは同じよう

な環境にいたら、同じような残虐行為に踏み出していたかもしれないという戦慄を抱いて聞くべきです。なぜナチスドイツが、何百万ものユダヤ人を強制収容所の中で大量虐殺をすることができたのか、私たちは不思議に思います。けれども、良く調べると、その実行者であるナチスの幹部は、日々、その収容所の運営に指示を与えているのですが、帰宅すると子煩悩ぶりを発揮し、家族愛に満ちていた人々でした。アルゼンチンでイスラエルのモサドに捕まえられたアイヒマンも、彼が本人であると確認されたのは、妻の誕生日のための花束を買っていたからです。

このアイヒマンのことを考えながら、アメリカ人の心理学者が「アイヒマン実験」というものを行いました。さらに、「スタンフォード監獄実験」というものを行いました。それは、刑務所を舞台にして、普通の人々が特殊な肩書きや地位を与えられると、その役割に合わせて行動してしまう事を証明しようとした実験で、それは見事に証明、いや予測以上の結果でした。精神的に何ら疾患を持っていない、また過去の経歴で悪いことをしていない普通の人々が看守役になり、また囚人役になりましたが、看守は囚人に対して数々の虐待行為を行ない、囚人役の多くが精神錯乱をきたしたのです。

ある人は、人の心を「泥が底にたまっている井戸」に喩えました。その田舎にある井戸は、いつも冷たい水をたたえていましたが、底には泥がたまっていました。だから、普段はきれいな水も、石を投げ込んだり、蛙が飛び込んだりすると、泥が底から上がってきました。しばらく待って水を汲まなければいけません。同じように、人の心の底には泥が沈んでいると言えるのです。イエス様は言われました。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そして、高ぶり、愚かさであり、・・(マルコ 7:20-22)」

2B 良く見せる性向

福音を信じるということは、このことを素直に認めて十字架の前に立つことです。自分の姿を正直に見つめて、「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら・・・(1ヨハネ 1:9)」とあるように、神の前に出て、その罪をそのまま言い表して、キリストの血と御霊によって洗い清めていただきます。

ところが、私たちはどうしても、自分の本当の姿を見せないようにします。それは、周りを攻撃することによって自分を守ろうとしますし、うんとも言わせないようにして見えぬ圧力を他者にかけることによって行うこともありますし、「私は、こうすべきだ」と自分に言い聞かせることによって行う場合もあります。「べきだ」という言葉は、キリスト者になってからも陥る罠であり、「自分をもっと他人を愛すべきだ」と思いながら、自分の心がどうなっているかを見つめようとしないのです。

私たちには、どうしても周りからよく見られようとする行動に移ってしまいます。実際よりも賢く見せようしたり、実際よりも霊的に見せようしたり、本当は祈っていないのに、あたかも祈っているかのように見せたり、外に対する働きかけを行なっています。実は私たちは、本来の性質がパリ

サイ派的であると言えます。つまり、「彼らのしていることはみな、人に見せるためです。(マタイ 23:5)」これがまさに、パリサイ派の人たちでありました。彼らの外側の行ないは立派でしたが、その真面目さの後ろに隠れている内面の汚れについては、気づこうともしませんでした。人に褒められたい、お金好き、慈しみにかけるなど、そういった心の奥のことからはないがしろにされました。

3B 自我と超自我

私たちは、他の人によく見られたいと思うばかりに、本当の自分さえ見えなくなるという、自分に対する盲目状態を作り出します。自分の中で理想状態の自分を作りあげていて、それが本当の自分であると思い込んでしまうのです。そのために、「自分はそれほど悪くはない」という自負心につながっています。

心理学の用語を借りますと、自分には、自我と超自我があります。自我とは本当の自分のことで、超自我というのは理想とする自分のことです。この間には大きな開きがあります。開きがあればあるほど、神経症に悩むことになると心理学者は言います。そこで、そのような心理学的カウンセリングを受けると、心理学カウンセリングでは、心理状態が安定することがその目的ですから、その理想の自分を引き下げ、本当の自分に近づけることを行なうのです。「そんなに苛立たしいのであれば、一度、怒ってみるのよ。」と、私たちも何気にアドバイスしたりしませんか？これが心理学的アプローチです。

イエス様はどうだったでしょうか？その反対です。「あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。(マタイ 5:48)」と言われました。主は私たちに、自我を超自我に引き上げるように呼びかけておられます。あるべき自分があるけれども、本当の自分を変えられて、そのあるべき自分に近づいていくように呼びかけておられます。そして、それができるように主は積極的に働きかけてくださいます。

私たちには絶対にできません。けれども、神がキリストにあってそれを可能にしてくださいました。イエス様はご自身が十字架につけられることによって、それを可能にされました。私たちの古い人、その自我を釘づけにしてくださいました。そのことによって、よみがえったご自身が私たちのうちに生きてくださって、ご自身が私たちの内で働いて、私たちを通して事を行なわれることを選ばれたのです。このことをパウロが言いました。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。(ガラテヤ 2:20)」

そして、それは心の刷新と変革によって与えられます。新しい契約について、主はエゼキエルにこう教えられました。「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあな

たがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。(エゼキエル 36:26-27)」石のようにかたくなな心を、主ご自身が肉の心に変えてくださり、それで神の命令を守ることができるようにしてください。これは神の霊が与えられるからです。

3A 自己を知る必要性

1B 回復の始まり

ですから神は、いつも理想の自分と現実の自分の間に悩む私たちに、福音を与えてくださっています。私たちがしなければいけないことは、まずは、自分をごまかすことを止めることです。自分には問題があることを認めることです。自分には罪があることを認めることです。これは、とても痛々しい経験です。けれども、これを通らなければ、その後の変化を期待することはできません。

何かの中毒になっている人が、回復する第一歩は、自分が中毒になっていることを認めることから始まります。もし認めることができたなら、九割は回復する可能性が出てきたとすることができるでしょう。自分の本当の姿に気づくことが大きな戦いなのです。アルコール中毒の人は「これで最後の一杯にする。」と決めて飲みますが、飲むたびに「最後の一杯にする」と言い続けます。同じように、自分に問題がないと思っている間は、その問題を継続して行ってしまうのです。

2B 罪の告白

「自分にごまかしてはいけません」ことをしっかりと教えているのは、ヨハネの第一の手紙であります。1章 5-7 節までまず読みます。「神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。もし私たちが、神と交わりがあると断言しながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを断言しているのであって、真理を行ってはいけません。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。(1ヨハネ 1:5-7)」もし私たちが、自分に越えられない弱さや欠点、聖書で罪と言われているものがあるのに、その問題に直視しないで、それで「でも、私はクリスチャン。神さまとの交わりがある。」と言ったら、それは嘘だ、と言っています。神の救いは受けているかもしれない。けれども、神との交わりは断ち切られています。

ですから、神が光であられるように、自分も光の中を歩まなければいけません。けれども、それはどのようにすればよいのか？次を読みましょう。「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。(8-10 節)」

二つの嘘をヨハネは教えています。一つは、「罪はない」と言う嘘です。自分は本質的には悪い

ことをしていないが、特殊な関係にいたからそのような悪いことをしてしまったのだ、というようなことを言ったら、それは、罪はないと言っていることです。いいえ、本質的に罪人だから、環境はきっかけになったでしょうが、本当の自分が露わになっただけです。もう一つは、「罪を犯していない」ということです。神の律法に照らして罪を犯したのに、そうではないと言い張るなら、「神よ、お前が間違っている」と言っているに過ぎない、神を偽り者にしている、ということです。

この二つの嘘をやめて、私たちが真実に自分の罪を言い表すなら、どう書いていますか、「神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」と約束してくださっています。これこそが福音、良い知らせです。

3B 神の啓示

ですから私たちの祈りには、ダビデの祈った祈りが必要になります。「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。(詩篇 139:23-24)」私が自分を知ることができません。だから、主ご自身が自分の本当の姿を啓示してくださるよう、自分を調べてくださるよう祈るのです。

聖霊がそのまま教えてくださる時があります。また、主が試みを与えてくださる時があります。イスラエルの民が荒野の旅をしたのは、彼ら自身が自分を知るためであったことを主は話しておられます。「あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。(申命記 8:2)」私たちが試練を受ける時に、それは神が私たちの心を知りたいと思われているからではありません。神は初めから私たちの心にあるものをすべて、ことごとくご存知です。そうではなく、私たちが自分自身をそれらの試みによって知ることができるようにするためであります。そのことによって、自分自身に頼らず、もっぱら主によってのみ生きるようにさせるのです。

どうか、主の前で素の自分に戻りましょう。主がその自分を洗い清め、癒し、そのありのままを受け入れてくださいます。主はイスラエルを虫けらと呼んでおられ、その虫けらを助け、救ってくださると言われています。「恐れるな。虫けらのヤコブ、イスラエルの人々。わたしはあなたを助ける。…主の御告げ。…あなたを贖う者はイスラエルの聖なる者。(イザヤ 41:14)」人を虫けらと呼ぶとは何様だ！といらだたしくなるかもしれませんが、私たちが本当の自分に出会った時、自分は虫けらでもうだめだ、と思うとき、主は助け、憐れんでくださるのです。